



一日も早い戦火の終息を、
心から祈ります。

下川 哲『食べる経済学』について

報告: 中田哲也

ウェブサイト「フード・マイレージ資料室」主宰

e-mail; foodmileage@jcom.home.ne.jp

コメント等は、すべて中田の個人的なものです。

1960年 徳島市生まれ。

1982年3月 岡山大学農学部卒業。(2012年 千葉大学大学院園芸学研究科修了。博士(農学))

1982年4月 農林水産省入省。

2001年4月～03年7月の間、農林水産政策研究所において、篠原孝所長(現・衆議院議員)の指導の下、フード・マイレージに関する研究に従事。

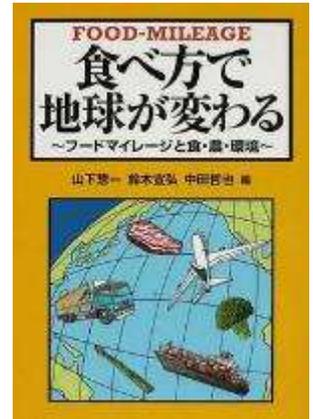
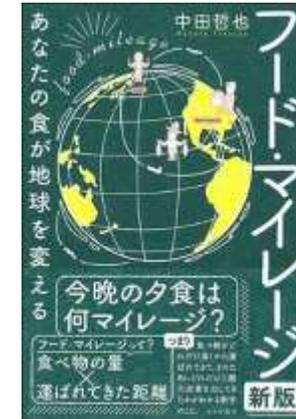
その後、関東農政局(さいたま市)、九州農政局(熊本市、2005.4～)、北陸農政局(金沢市)等を経て、2020年3月 定年退職。

現在、農林水産省統計部管理課勤務(再任用)。

個人的なライフワークとしてフード・マイレージの普及等に取り組み。

ウェブサイト「フード・マイレージ資料室」主宰。

(ブログ、メルマガ、小咄など) <http://food-mileage.jp>



著書 『フード・マイレージーあなたの食が地球を変える』(2007、2018(新版)、日本評論社)

山下惣一氏、鈴木宣弘氏との共著『食べ方で地球が変わる フードマイレージと食・農・環境』

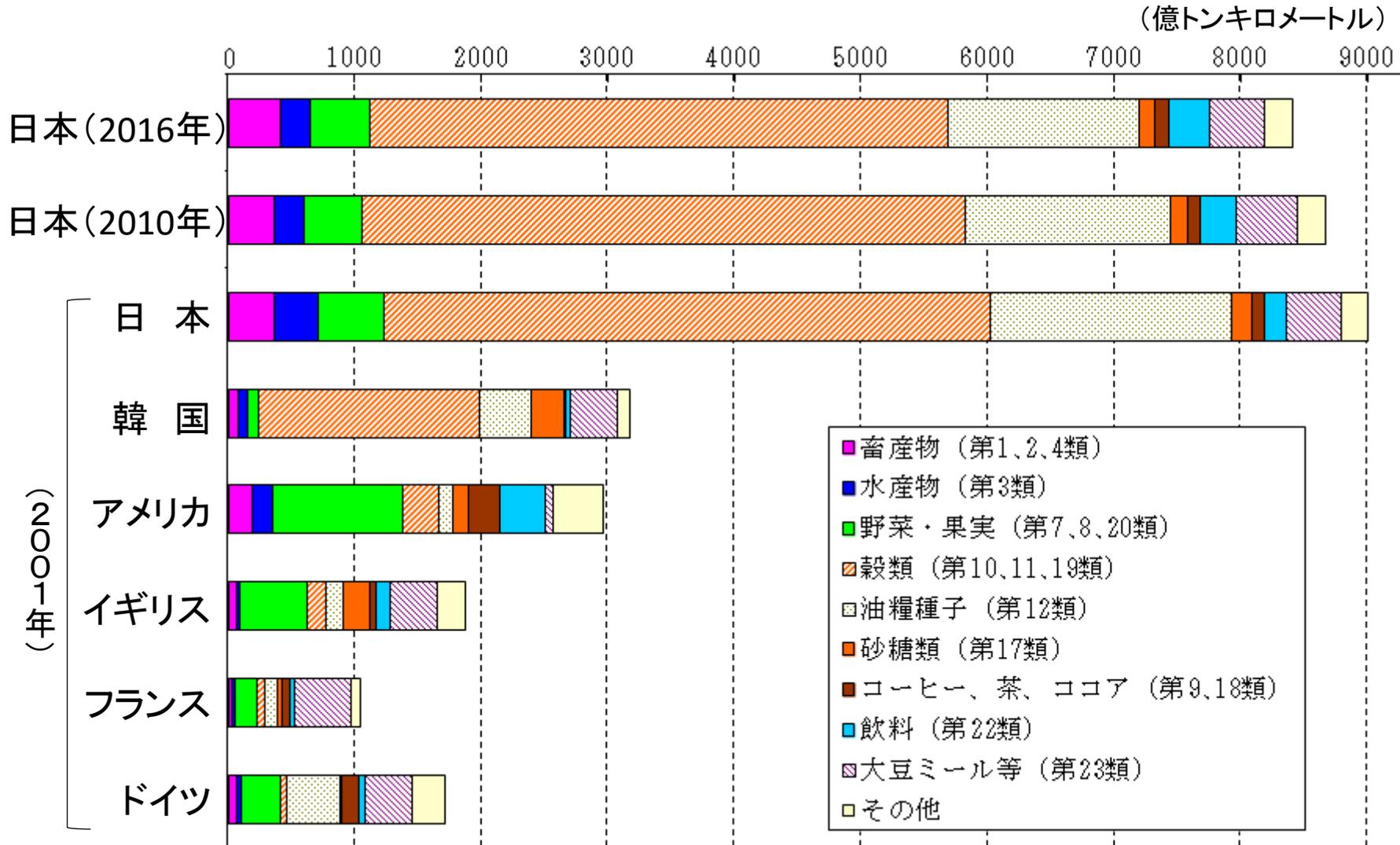
(2007.7、創森社)

現在、東京・東村山市在住。

自宅近くに市民農園の一画(30平米)を借りて農作業の真似事。



輸入食料のフード・マイレージの比較（総量、品目別）



フード・マイレージ = 食料の輸送量 × 輸送距離

注：世界最大は中国（計算していない。）

下川 哲『食べる経済学』（2021.11、大和書房）

<https://www.daiwashobo.co.jp/book/b590669.html>

大和書房
DAIWASHOBO

ホーム > 食べる経済学



詳細検索

会社案内

新着情報

連載

だいわ文庫

単行本

新刊



食べる経済学（単行本）

「食」が、私たち自身と世界にどんな影響を与えているのか、経済学の枠組みを使って、分かりやすく解説します！

<http://www.ienohikari.net/book/9784259546939>

(2007、家の光協会)

著者	下川 哲 著
ジャンル	単行本
出版年月日	2021/11/22
ISBN	9784479393740
判型・ページ数	4-6・272ページ
定価	1,870円（本体1,700円+税）

電子書籍



「人の食生活の**選択次第**で、**地球の未来が変わる**イメージ。そして、より良い選択肢に**気づいてもらう**ために政策などで働きかけているイメージ」

「**食は踊る**」も意味不明なところが気に入っています。（下川研究室HPより）



下川研究室

Food Economics



食を通して
社会を読み解く

私たちの身近な「食」は世界中の様々な社会問題とつながっています。そのつながりや問題について経済学の視点から明らかにし解決策を探っていく研究室です。



日本の小麦価格と
アフリカの暴動が
つながっている？

食料市場を通して世界中がつながっているという話。

日本は小麦の80%以上を輸入に頼っており、アフリカの貧しい国々の多くも小麦の大部分を輸入に頼っている。そのため、日本とこれら国々の小麦価格は国際市場を通してつながっている。そして、日本では些細な値上がりであっても、貧しい国々では生活への影響が大きく暴動を起こすほどに人々の不満が高まることもある。小麦価格の上昇は、異常気象などによる農作物の不作のせいだけでなく、バイオ燃料の需要拡大によるトウモロコシ価格の高騰のせいでもある。つまり、農業生産だけの問題ではなく、社会経済の問題でもある。

略歴・研究業績

SHIMOKAWA
Satoru



下川 哲

早稲田大学政治経済学術院 准教授

早稲田大・政治経済学術院 准教授。
2000年、**北海道大学農学部**農業経済学科卒業。2007年、米コーネル大学で応用経済学の博士号（Ph. D.）を取得。香港科技大学社会科学部助教授、アジア経済研究所研究員を経て、2016年から現職。国際・国内学術誌の編集委員も。
専門は農業経済学、開発経済学、食料政策。

日本経済新聞

トップ 読者 オピニオン 経済 政治 ビジネス 金融 マーケット マネーのほらけ テック

食から考える世界と未来(1) 地球とつながる私たちの食卓

早稲田大学准教授 下川 哲

2022年3月27日 2022年3月27日 10時 10分 掲載

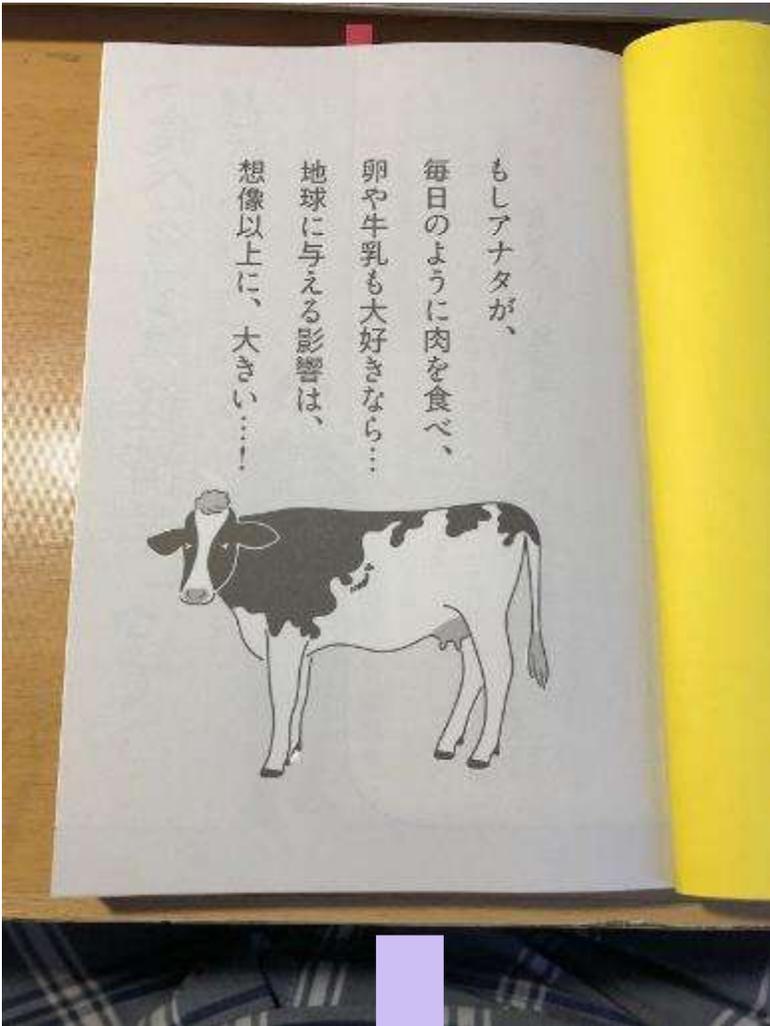
共有 印刷 複製 印刷 印刷 印刷 印刷 印刷 印刷

食料品の値上がり、繰り返される産地偽装、なかなか改善しない食料自給率……。食にまつわる問題は、日常生活の中にも絡み合っています。しかし、世界にはさらに多くのより深刻な問題があらわれています。

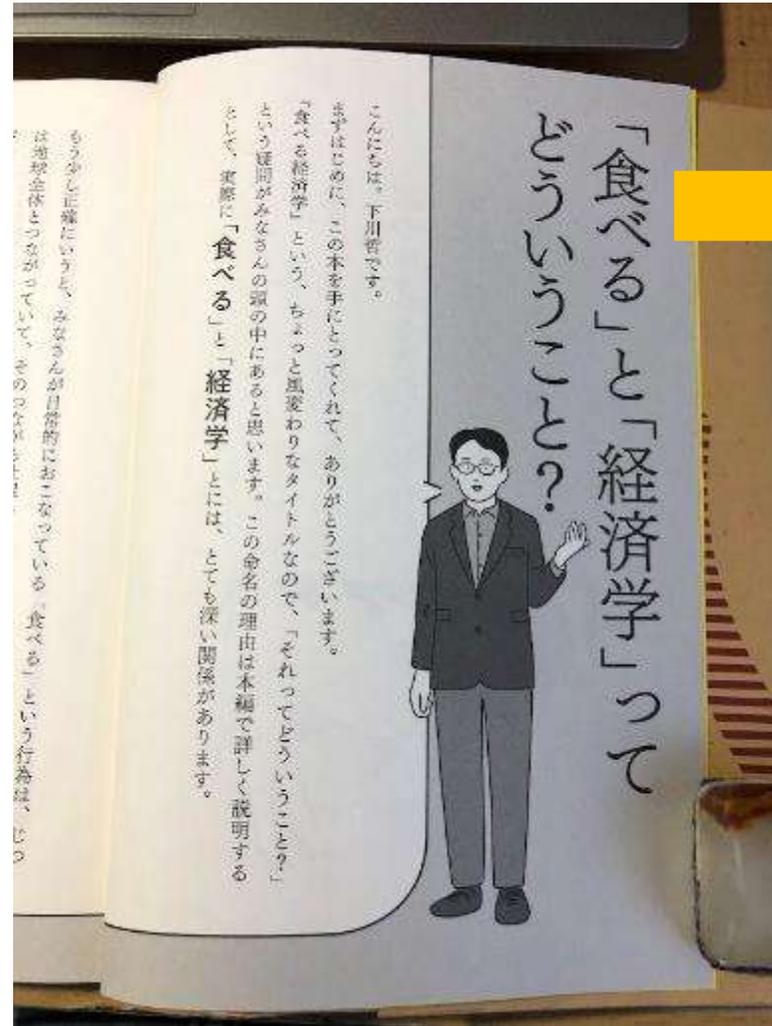
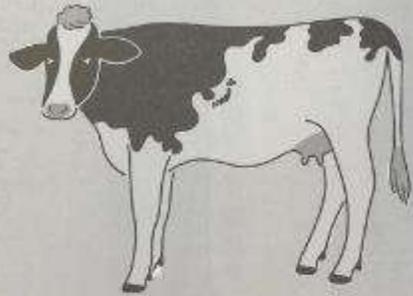
世界人口は急速に増え続け、穀物生産量を2050年までに現在の約1.7倍に増やす必要があります。一方、食料生産に使える水や農地はほとんど増やせません。カーブは技術

食から考える世界と未来(1)～(10)
日本経済新聞朝刊・やさしい経済学
2022. 3/31～

口絵



もしアナタが、
毎日のように肉を食べ、
卵や牛乳も大好きなら…
地球に与える影響は、
想像以上に、大きい…!



こんにちは、下川哲です。
まずはじめに、この本を手にとってくれて、ありがとうございます。
「食べる経済学」という、ちょっと風変わりなタイトルなので、「それってどういうこと？」
という疑問がみなさんの頭の中にあると思います。この命名の理由は本編で詳しく説明する
として、実際に「食べる」と「経済学」とには、とても深い関係があります。

「食べる」と「経済学」って
どういうこと？



「食べる」と「経済学」には、とても深い関係があります。

「食べる」という行為は、じつは地球全体とつながっていて、そのつながる仕組みを理解するのに、経済学という枠組みがぴったりなのです。

あなたの「食べる」は、**壮大なテーマ**と密接につながっているのです！

(人口増加、貧困、格差、都市化、気候変動)

【(中田コメント) 肉食、畜産が諸悪の根源？ 問題は畜産の生産方式では？ → p. 15】

本書の構成（目次）（p. 10）

はじめに

第一部 地球と食卓をつなぐ感覚 — 「食べる」が形作る社会

1章 「食べる」と「食料生産」

2章 食料市場が社会をつなぐ

3章 食料市場の限界

第二部 飢える人と捨てる人 — 「食べる」にまつわる社会問題

4章 避けられない自然の摂理

5章 市場が効率的だとしても

6章 市場の失敗のせいで

7章 つきまとう政治的な思惑

8章 「人間らしさ」の難しさ

第三部 未来に向けた挑戦 — 「食べる」を今より良くするための試行錯誤

9章 自然の摂理に立ち向かう

10章 食料市場の限界を踏まえて

11章 「人間らしさ」を加味する

第四部 未来をイメージする — 「食べる」から考える未来社会

12章 これからの「食べる」について

参考文献

はじめに (p. 4)

- 「私は昨日、日本全国15道県と海外8か国からの食材を食べました」
→ 私たちの普段の食事は、**日本中及び世界中の多くの生産地**に支えられて成立。
- **牛丼1人前**を作るために必要な資源
牛肉100g、タマネギ70g、米250g、醤油10cc、砂糖小さじ1
トウモロコシなど1.1kg、水560L、1m²以上の耕地（間接的に使っている。）
- 1日1人当たり平均で牛肉10gを食べるとすると・・・
地球全体で2,884万t（= 10g × 79億人 × 365日）
→ トウモロコシなど3億2千万トン、3千万ha以上の農地が必要
「食べる」という行為は、私たちの**想像力をはるかに上回る影響力**
【cf. 世界のトウモロコシ生産量：約12億トン】
- 「人間らしさ」（**人の認知能力の限界**）が、社会問題の要因
- 食べることは、**最も身近で不可欠な活動**のひとつ。
その**社会的な意味やありがた**について、**実感**と結びつけながら読み解き、**道しるべ**の一つに。

第一部 地球と食卓をつなぐ感覚 — 「食べる」が形作る社会

1章 「食べる」と「食料生産」 (p. 17)

- 「食料生産」：堅苦しい。心理的距離
「食べる」：より身近で自分に関係する行為

- 「食べる」ことは特殊
 - ① 体外の物を体内に取り込む。
 - ② 生物的な下限と上限がある—絶対的な必需品、低い所得/価格弾力性
【→ 他にも、保存性が乏しい、情報の非対称性（レモンの経済学）等】

- 「食料生産」もまた特別
 - ① 自然の力には勝てない。
 - ② 環境負荷ゼロはあり得ない。
【→ 他にも、生物の代謝を利用、土地・地域性の制約、生産者は小規模多数、多面的機能 等】

- 食卓の向こう側を見てみよう
 - ・ 「食べる」と「食料生産」は表裏一体
 - ・ 私たちはなぜ実感できないのか：急激に進む都市化とグローバル化

第一部 地球と食卓をつなぐ感覚 — 「食べる」が形作る社会

2章 食料市場が社会をつなぐ (p. 39)

○ 「**食料市場**」とは：限られた資源を効率的に配分するための仕組み

- ・ 安くて美味しいのは市場のおかげ
- ・ 国内の市場（国産）に加えて、国際食料市場（輸入）も必要

○ 市場の発展のためには**分業**が必要

→ 食料生産の現場を**より遠く**に感じるように。**物理的距離の拡大。**

【→ 「食と農の間の距離」（フード・マイレージ）の拡大、「顔の見える関係」の喪失】

第一部 地球と食卓をつなぐ感覚 — 「食べる」が形作る社会

3章 食料市場の限界 (p. 56)

- 効率性にはフェアの精神はない？
 - ・ 「効率性」には、**公平性**などの**倫理的**な価値判断は含まれない。
- 市場が**力不足**な3パターン
 - ① 市場が効率性でも起こる問題：栄養不足/肥満、食品ロス
 - ② **市場の失敗**：食品偽装、自然環境の破壊
 - ③ 政治的な思惑：過剰な農業保護、輸入制限

読者への質問 (p. 63)

あなたは、どのような「食べる」が、**社会にとって最も望ましい**と考えますか？

- ・ 「安くて美味しいもの」⇔「コストと環境負荷が低い食品」
- ・ 食料を生産する人は数%、社会の**90%以上**は「食べる」側
- ・ 私たちがどのような「食べる」を望むか次第で、**将来の社会の形**が変わる。

第二部 飢える人と捨てる人 — 「食べる」にまつわる社会問題

4章 避けられない自然の摂理 (p. 67)

- 食料生産は**自然条件**から大きく影響
 - 「食べる」側 : 食品の**値段が不安定**に。(需要の自己価格弾力性)
 - 「食料生産」側 : 農業による**収入**も不安定に。(豊作貧乏)
栽培期間が長い。(多くのリスク)
- **気候変動**の複雑な影響
 - 気候変動が主要穀物の生産量に与える影響 (IPCC等)
: 2030年頃までは世界全体の収穫量は増加
その後も気温が上昇し続けば、2100年にかけて大幅に減少
 - 地域格差が拡大する恐れ (技術力、インフラ等)
: **飢餓人口**は0.4~1.7億人増、75%はサブサハラに集中 (IPCC等)
→ 国際食料市場の役割が一段と重要に。

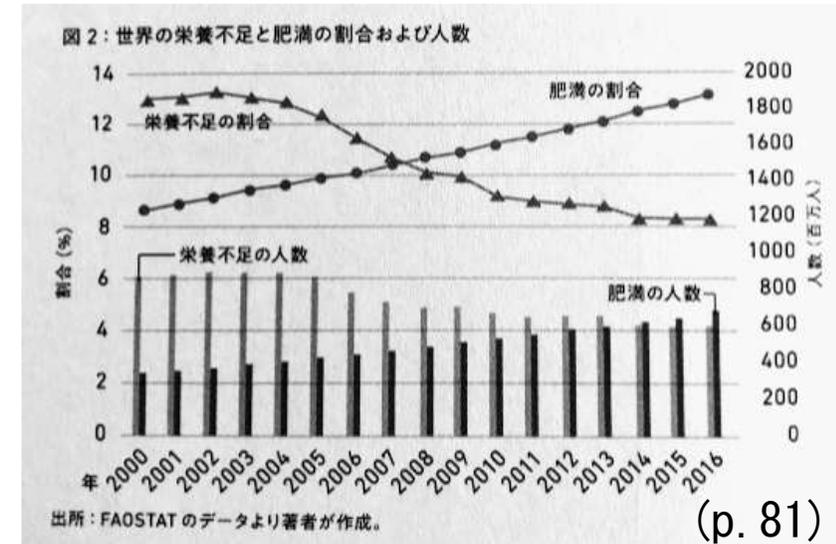
【→2021年の飢餓人口 : 8億2,800万人、2019年から1.5億人増。(2022. 7、FAO等)】

第二部 飢える人と捨てる人 — 「食べる」にまつわる社会問題

5章 市場が効率的だとしても (p. 80)

○ 栄養不足と肥満の共存 (どちらも増えている。世界的な不平等)

- 全人口を養うのに十分な食料供給量があるはず。
→供給カロリー量は国の間で大きな差
- 貧しい国でも肥満が増加



○ 市場がいくら効率的であっても再分配は困難

【経済力の格差】 【→ 正に「有効」需要】

先進国の肥満者が食べる量(食品ロス)を減らしても、途上国の栄養不足の人たちには届かない。

- 食生活の改善: 栄養不足と肥満を同時に減らすことも可能
(→「人間らしさ」の問題、8章)

○ 食品ロス

- フード・ロス (生産、流通段階) とフード・ウェイスト (消費段階)
- 食品ロスはゼロにはできない: 傷みやすさ、グローバル化と分業化

第二部 飢える人と捨てる人 — 「食べる」にまつわる社会問題

6章 市場の失敗のせいで (p. 101)

○ 「食の安全性と偽装」という難題

(BSE、雪印グループ、ミートホープ、事故米不正転売など枚挙にいとまなし)

[理由] 食品の特性と市場の構造

: 安全性等は外見から判定できない。情報の非対称性。加工度。

○ 「肉食と環境」という悩みのタネ 【(→ 次頁)】

- ① 「食料生産」側：温室効果ガス（メタン等）の排出、大量の水を消費、排泄物
- ・ 食料生産の中でも、畜産による自然環境への負荷は特に大きい。
 - ・ 社会的損失（負の外部性）が食肉の生産コストや価格に反映されていない。

② 「食べる」側：安価な肉を食べ過ぎている。

EATランセット委員会報告(2019)

: 持続可能な食生活のためには、
食肉消費量を60%減らす必要。[→p. 21]

【→格差の是正、縮小の方が重要では】

表4：2018年の世界と5地域における食肉の1週1人当たり供給量

	世界	オセアニア	アメリカ	欧州	アジア	アフリカ
牛肉	175 g	490 g	548 g	261 g	91 g	114 g
豚肉	298 g	473 g	350 g	666 g	294 g	(p. 119)
鶏肉	298 g	829 g	819 g	469 g	193 g	130 g
合計	771 g	1792 g	1717 g	1396 g	578 g	270 g

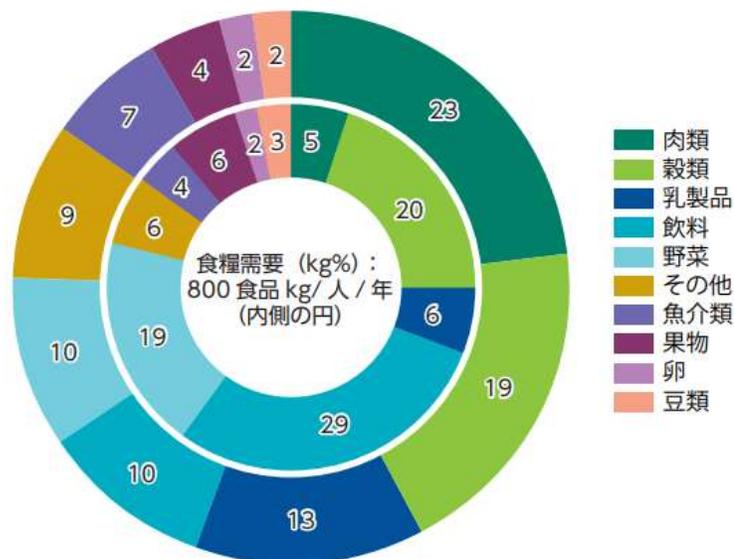
出所：FAOSTATのデータより著者が作成。

「肉食と環境」という悩みのタネ？

【→ (日本の) 畜産の多くは輸入穀物に依存。施設(畜舎)で集約的に飼養。山地酪農、林間(水田)放牧、地域資源の有効の活用⇒環境、景観の保全】

図3-2-4 日本人の食に関連するカーボンフットプリント及び物的消費量の割合(2017年)

カーボンフットプリント (kgCO₂e) : 1,400kgCO₂e/人/年 (外側の円)



注：平均ライフスタイル・カーボンフットプリントおよび物的消費量の2017年時点の推計値。

内側の円は物的消費量の割合を示す。外側の円はカーボンフットプリントの割合を示す。

資料：公益財団法人地球環境戦略機関 (IGES) 「1.5℃ライフスタイル—脱炭素型の暮らしを実現する選択肢—」

[出典]

令和3年版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書
<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/r03/index.html>

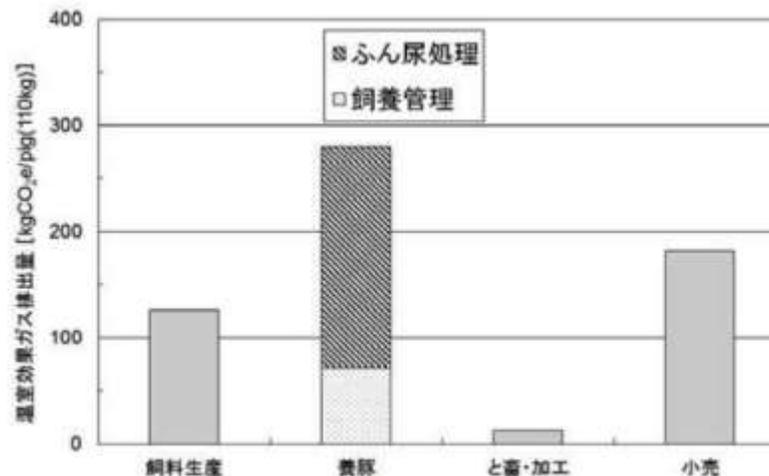


図4 肥育豚1頭当たりの温室効果ガス排出量

[出典]

菱沼竜男「LCA手法を用いた豚肉生産システムに伴う温室効果ガス排出量の推計」

『環境情報科学学術研究論文集29』(2015)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ceispapers/ceis29/0/ceis29_159/_pdf



あか牛の放牧
(熊本・阿蘇地域、2016.8)



食品廃棄物等を有効活用した放牧豚
(福島・喜多方市山都、2022.5)

第二部 飢える人と捨てる人 — 「食べる」にまつわる社会問題

7章 つきまとう政治的な思惑 (p. 125)

○ 途上国ほど農業を冷遇、先進国ほど農業を優遇。

- ・ 途上国：安く買い取って輸出。都市部の労働者に安い食料を供給。
- ・ 先進国：自国の食料の維持、食料安全保障。
→途上国の農業発展を阻害しているとの批判。

GATT-UR(1986~93)：関税化、輸出補助金削減、デカップリング

○ 正当化される非常時の輸出規制

- ・ WTO体制化でも、食料安全保障のための穀物輸出規制等は広く認められている。
2007~8、2010~11：異常気象による不作、バイオ燃料需要の増大
→20を超える途上国で食料暴動が発生

2020：新型コロナウイルスの感染拡大、ロックダウン等→22か国が輸出規制。

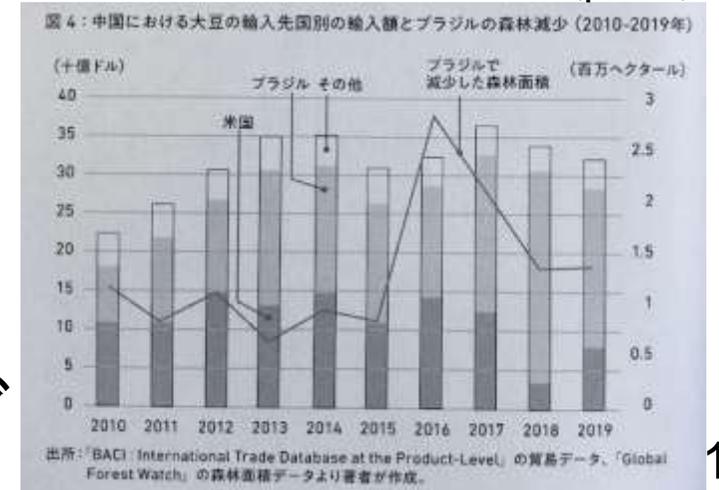
(p. 81)

- ・ 日本への影響は無視できるレベル。

【→今回（ウクライナ危機）は？】

○ 米中貿易戦争と森林破壊

- ・ 中国のブラジルからの大豆輸入が急増→ブラジルにおける森林減少



第二部 飢える人と捨てる人 — 「食べる」にまつわる社会問題

8章 「人間らしさ」の難しさ (p.145)

従来の経済学の枠組み：「人間らしさ」を単純化し過ぎていた。非合理的。
「人間らしさ」が「食べる」にまつわる社会問題解決の妨げに

○ 「食べる」は**認知バイアス**がかかりやすい？

- ・ 生命維持に直結、体内に取り込む。
→ 楽観バイアス、正常性バイアス、オーストリッチ効果
メンタル・アカウンティング、リスク補償行動、現状維持バイアス 等
- ・ 現在志向バイアス：将来の健康を犠牲にした不健康な食生活を選択。

○ **食の安全性への過剰反応**

- ・ 利用可能性ヒューリスティック/カスケード（入手しやすい情報、SNS）→BSE
- ・ 確実性効果、ゼロリスク効果、認識の慣性、確証バイアス→福島県産米

○ 「食料生産」にも**バイアス**がかかる

- ・ 注意力の限界（注意が向いてない部分）
- ・ 窒素肥料の与え過ぎ、不十分な除草

第三部 未来に向けた挑戦

－「食べる」を今よりよくするための試行錯誤

9章 自然の摂理に立ち向かう (p. 183)

シンプルな解決策はない。少しでも改善するための試み。

- 影響を小さくするための社会的仕組み
 - ・ 長期保存と産地リレー

- 影響を小さくするための技術開発 【→ cf. 「スマート農業」】
 - ① 遺伝子工学の活用：従来の技術では人口増加や気候変動に全然間に合わない。
 - ・ ゲノム編集：既に持っている遺伝子を一部変異(自然界でも起こり得る変異)

 - ② 植物性代替肉、培養肉【→ 別の環境負荷・エネルギー消費？ それよりも「まっとうな」肉を】
 - ・ 環境負荷の削減：GHG排出量89%減、土地96%減、水87%減(GFI、2021)
 - ・ 抗生物質の乱用、感染症による大量の殺処分回避。

- 昆虫食 【→ 国内では米や牛乳の需要が低迷、価格が下落】
 - ・ 養殖しやすい、環境負荷が小さい、栄養価が高い。

第三部 未来に向けた挑戦 – 「食べる」を今よりよくするための試行錯誤

10章 食料市場の限界を踏まえて (p. 203)

- 「食べる」側の選択に働きかける手段
 - ① 食料の**相対価格**を変える。
 - ・ 脂肪税（デンマーク）、ソーダ税（アメリカ）
 - ② **食品アクセス**を制限/改善
 - ・ フード・デザート地域に生鮮食品販売店を設置。ジャンクフードの禁止。
 - ・ 心理的リアクタンス：自由を回復しようとする反発作用。
 - ③ **食品ラベル**
 - ・ 「**情報の非対称性**」の改善。
 - ・ 食品ラベルのツボ：内容やデザインを工夫、単純化。
 - ・ エコラベル：認知度の向上が重要。
- 「食料生産」側への働きかけ
 - ① **GHG排出権取引**制度：農業セクターに適用した国はない。
 - ② 食品市場の**DX化**：トレーサビリティ、環境負荷・ロスの削減。

第三部 未来に向けた挑戦 – 「食べる」を今よりよくするための試行錯誤

11章 「人間らしさ」を加味する (p. 229)

補助的な工夫、人の選択や行動を変える「取っ掛かり」

○ 考えて選択する状況を作る

① ナッジの活用

：店員の声掛け、半分に区切ったショッピングカート、事前に1週間分の献立。

② 無意識により良い選択をさせる

- ・ デフォルト効果、顕著性効果、社会的証明
- ・ スマーター・ランチルーム運動（2009～、アメリカ）
配置、見えやすさ。

○ 「食料生産」における「人間らしさ」を加味した試行錯誤

① コミットメント・デバイス：来期の農業生産のために貯蓄する仕組み。

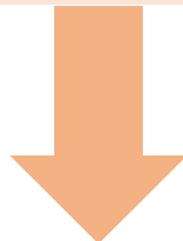
② 情報の伝え方を工夫

第四部 未来をイメージする – 「食べる」から変える未来社会

12章 これからの「食べる」について (p. 251)

読者への質問 (p. 63)

あなたは、どのような「食べる」が、社会にとって最も望ましいと考えますか？



専門家らが提案する具体的な答え (ある程度のコンセンサス)
健康的で持続可能な食生活

ポイント：「健康的」と「持続可能」は同時に改善できる。

EATランセット委員会が提案している基準 (2019) [次頁]

第四部 未来をイメージする – 「食べる」から変える未来社会

12章 これからの「食べる」について (p. 251)

○ EATランセット委員会 (2019)

「2050年までに達成すべき『健康的で持続的な食生活』の基準」

: 食品カテゴリーごとの摂取量の基準値

○ EATランセット基準と現在の食生活

- ・ 世界全体：赤肉 (288%)、イモ類 (293%)、卵 (153%)
- ・ 地域ごとに状況は大きく異なる。

北米：赤肉 (638%)、卵、鶏肉等が大きく超過。

(日本は比較的低い：赤肉 221%)

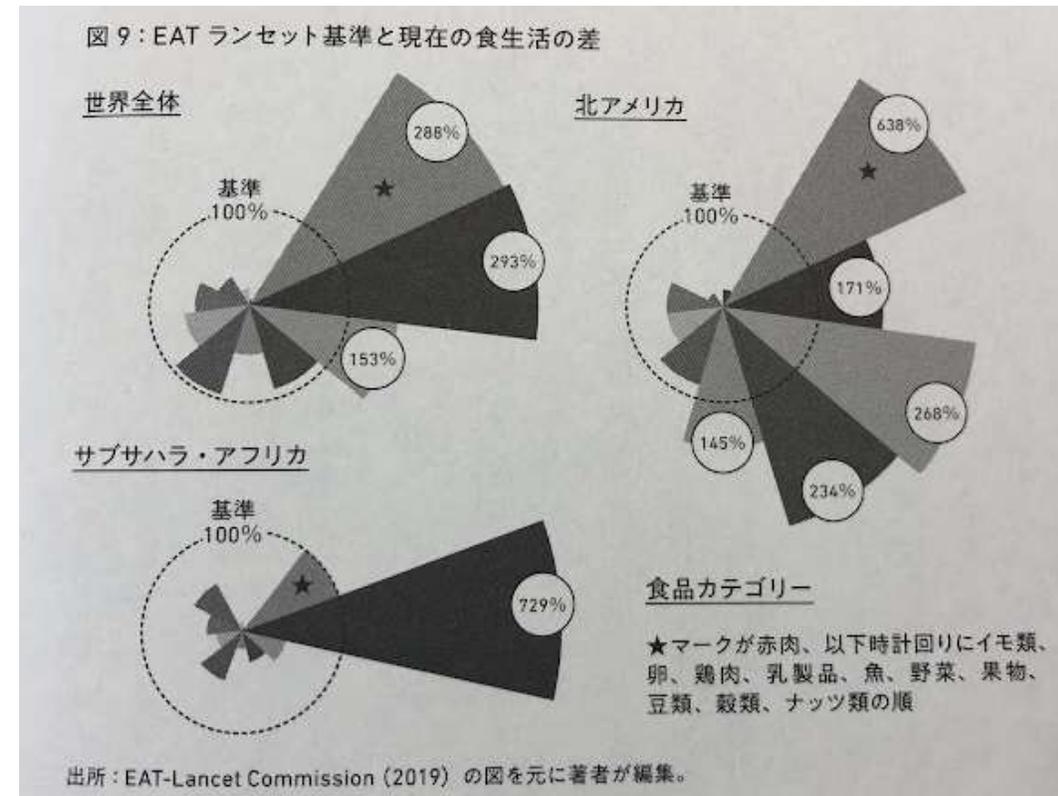
サブサハラ：イモ類が大きく超過、他は不足。

【→ 「日本型食生活」の可能性?】

○ 基準実践のために**必要なコスト**の最安値

: 190~260円/人・日

- ・ 低所得国では3人中2人が実践できない。
- ・ 貧困層の所得増、価格引き下げ、食料援助等が必要



(p. 256)

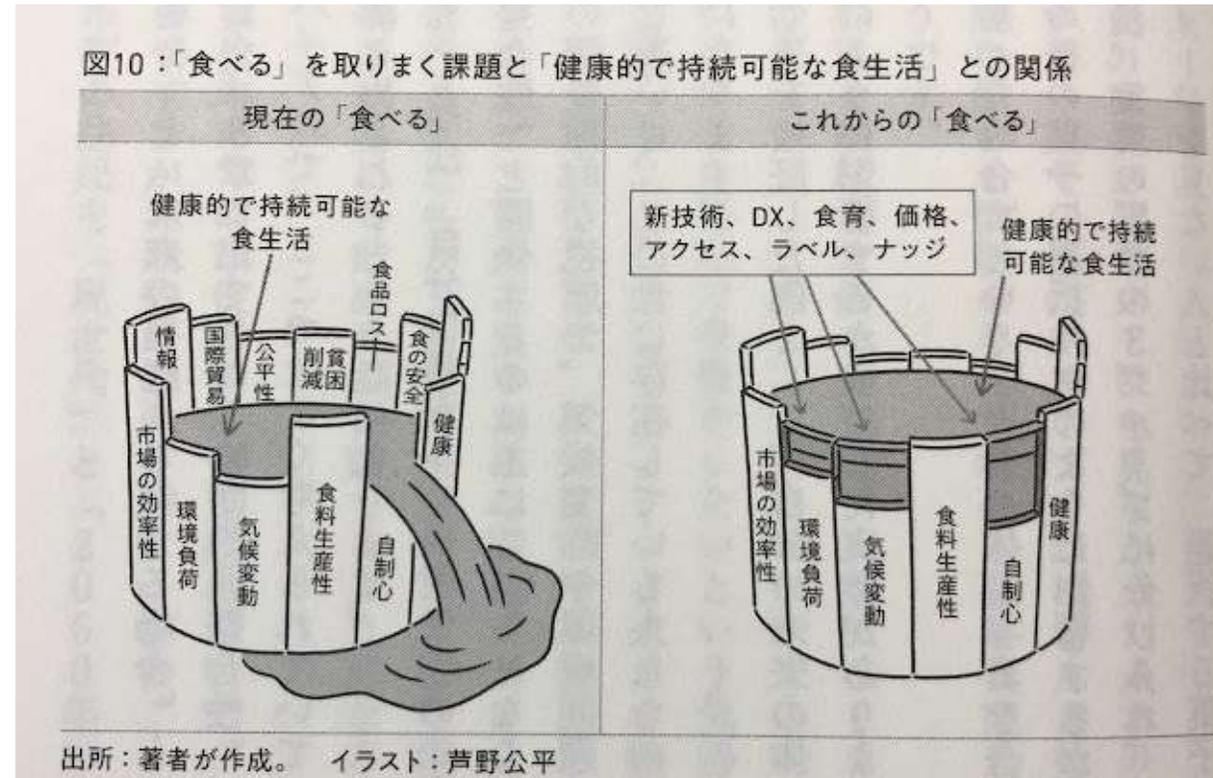
第四部 未来をイメージする – 「食べる」から変える未来社会

12章 これからの「食べる」について (続き、p. 259)

特に重要かつ困難な課題

- ① 環境負荷を減らしつつ、増え続ける世界人口を養い、さらには果物や野菜をより安く提供できるような食料生産を実現する。

- 様々な対策を**同時進行**で(**バランス**)
: どれか一つでも達成度が低いと全体の実現度も低くなる (リービッツの最小律)
- 特に達成度の低いもの (**桶の側板**で特に低いもの) を改善。
新技術、DX、価格政策、食育、ナッジ等を活用



第四部 未来をイメージする – 「食べる」から変える未来社会

12章 これからの「食べる」について（続き、p. 261）

特に重要かつ困難な課題

- ② できるだけ多くの人たちに「健康的で持続可能な食生活」を実践してもらう。

「**未来の視座**から考える」

(1) **中長期的**視座：自分自身もしくはは現世代の未来

- ・ 仮想未来の体型のイメージ→健康的な菓子を選ぶという実験（アメリカ）

(2) **超長期的**な視座：将来世代の未来

- ・ フューチャー・デザイン

： 将来世代のためなら喜んで我慢したいという気持ちを持つような社会の仕組みをデザイン。

（岩手・矢巾町の上水道事業、長野・松本市の市庁舎建設）

第四部 未来をイメージする —「食べる」から変える未来社会

12章 これからの「食べる」について—まとめ— (p. 265)

- 通常、将来世代の視座を獲得することはかなり困難。
 - ・ しかし身近な「食べる」であれば、想像することはそれほど難しくないのである。
(おいしいものは、未来の人たちもおいしいと感じる)
- 「食べる」を取り巻く状況は急激に変化。
 - ・ 未来の人たちが「おいしいものが食べられなくなる不利益」を想像（実感）。
- 私たちに最も不足している感覚
: 現在の私たちの「食べる」が、未来の「食べる」や地球環境と密接につながっているという感覚。

みなさんの「食べる」はこれからも毎日つづきます。
「普段の食生活を見直し、ほんの小さな変化でも、積もり積もって
大きな効果につながるということだけは覚えておいてください。

全体を通じたコメント（新たな問題意識等）

【多くの人に読んで頂きたい好著（入門書/専門書）】

自らの身近な「食」が地球規模の環境や資源とつながっていることに「気づく」ことで、一人ひとりの食生活の見直しを促す。【極めて重要なアプローチ】

一般の人にも分かりやすい文章、イラストなどを活用。
心理学を含め、内外の研究成果を引用。充実した参考文献リスト。

しかし、現在のウクライナ情勢や世界の食料情勢を踏まえると、
個々人の「気づきと選択」に任せておくだけで、十分か？

中長期の地球環境問題への対応も重要だが、
足元の食料安全保障（食料の安定供給）が喫緊の課題となっているのでは。

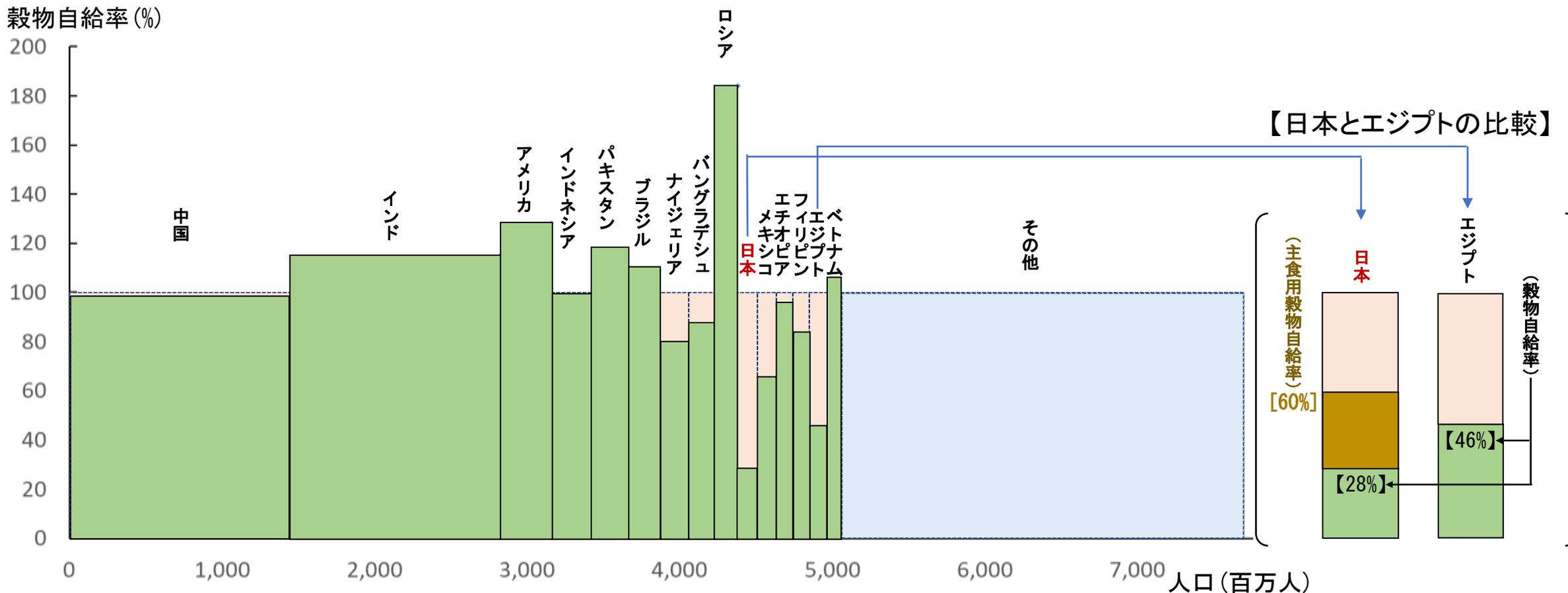


図245 世界の人口大国と穀物自給率（2018年）

- 注：1) 横軸は人口で、人口の多い国から順に並べてある（上位15か国）。
 2) 縦軸は穀物自給率で、100%を超過している部分は輸出、下回っている部分（薄桃色の部分）は輸入を表している。
 3) 右端の図については、日本の穀物自給率は28%、主食用穀物自給率（褐色の部分）は60%であることを示している。

資料：農林水産省「食料需給表」 <https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/index.html>

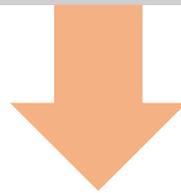
総務省統計局「世界の統計2022」 <https://www.stat.go.jp/data/sekai/0116.html>

（世界人口の推移：1950～2050年。元データはUN “World Population Prospects ”

出典：フード・マイレージ資料室 <https://food-mileage.jp/>

- 食料安全保障（食料の安定供給）をめぐる動きが活発化
 - 自民党 食料安全保障に関する提言（2022. 5）
 - 「農林水産業・地域の活力創造本部」（2013）
→ 「食料安定供給・農林水産業基盤強化本部」に改組（2022. 6）
 - 「食料・農業・農村基本法」（1999）改正の動き

丸山眞男「日本ファシズムの特質は、**農本主義的特質**が非常に優位を占めていること」



やはり、個々人（市民）の「気づき」と「主体的な選択」が基本。

ご静聴、有難うございました。